

太宰治の「散華」論

——三つの「死」の意味——

李 顯 周

はじめに

太宰治は昭和一九年三月『新若人』に短編小説「散華」を発表した。その中には太平洋戦争のシンボルともいえる「玉砕」がモチーフとして描かれている。これまでの太宰の作品傾向を窺ってみると、兵隊の死を直接素材として取り入れたのは、この「散華」が唯一の作品ともいえる。それでは「散華」の中に、当時の新聞マスコミから大いに戦死を賛美し、日本国民の感情を総力戦と煽動していた「アツツ島の玉砕」が、モチーフとして取り上げられていたのはなぜなのか。それにはまずアツツ島で玉砕した兵士の中に、太宰の知人である三田循司が含まれていたことがあげられるが、もう一つ注目しなければならぬのは、「散華」が掲載された雑誌『新若人』の存在である。というのは、雑誌『新若人』は「皇道精神」や「民族精神昂揚」を青少年に訴えるファシズム性向の強い雑誌であったからである。しかし「散華」には、玉砕に対する戦争賛美の描写とともに、当時太宰文学の一つの課題ともいえる「死」に対する思想も垣間見ることが出来る。本稿では小説「散華」と『新若人』という雑誌メディアとの関連性を論じながら、「散華」における「アツツ島の玉砕」の意味を追求すると同時に、それとは対照的なもう一つの死の分析を通して、戦時期の太宰文学における「散華」の位置付けを試みたいと思う。

一、「散華」における「玉碎」の意味

短編小説「散華」の中には、二人の青年の死が描かれている。それは作家である「私」の若い二人の友人の対照的ともいえる死である。それは作家志望の三井君の結核による病死と、詩人をめざしていた三田君の「アツツ島の玉碎」であった。まずこの節では、三田君の「アツツ島の玉碎」に関する「私」の感慨をめぐって具体的に考察してみることしよう。小説「散華」に登場する三田循司とその友人の戸石泰一は、実際太宰の知人であり、三田君の「アツツ島の玉碎」も実話をもとに書かれていたことがわかる。東京帝大の国文科の学生だった三田君と戸石君は、作家の「私」の所に通っていた。戸石君が快活で愛嬌のよい人物であるのとは対照的に、三田君は鉄縁の眼鏡をかけ、哲学者ふうの真面目な人物として描かれている。しかし「私」は周囲を華やかにするためにいつも道化役を演じる戸石君の味方をしてきた。そして詩人をめざしていた三田君は、「私」に一度も認められないまま出征し、アツツ島で玉碎するのである。

「散華」の主要なモチーフとして用いられている「アツツ島の玉碎」といえば、当時の新聞マスコミによって一斉に報道され、日本国民の感情を総力戦と煽り立てた宣伝となる最初の「玉碎」であるとされている。そもそも「玉碎」という言葉は、「玉が美しく碎けるように、名譽や忠義を重んじて、いさぎよく死ぬこと」を意味する。昭和一八年五月のアツツ島守備隊がアメリカ軍に対して総攻撃を敢行した後全滅したことを「玉碎」という言葉を用いて大本営本部が発表したことがきっかけに、マスメディアのほうでも次々と戦死を美化する言葉として使われるようになった。小説「散華」の中でも「美しく玉碎した」とか「玉碎の神の石柱」など、当時新聞・雑誌メディアが戦死賛美のために用いた言葉の使用がみられる。三田君の戦死について述べている箇所を引用してみると、

三田循司君は、ことしの五月、づば抜けて美しく玉碎した。三田君の場合は、散華といふ言葉も尚色あせて感ぜられる。北方の一孤島に於いて見事に玉碎し護國の神となられた（中略）任地に第一歩を印した時から、すでに死ぬる覚悟をしておられたらしい。自己のために死ぬのではない。崇高な献身の覚悟である。（『新若人』昭和一九年三月号、

八一頁）

のように、「美しく玉碎した」「護国の神」「崇高な献身」などの言葉によつて三田君の戦死が見事に美化されている。この引用で取り上げられた戦死賛美の言葉が、当時「アツツ島の玉碎」を報じる新聞記事とどう関わるのかを具体的にみてみよう。たとえば大本営からアツツ島の日本軍全滅が発表された昭和十八年五月三十一日の新聞「大阪毎日」の「忠烈の極・アツツ島守備隊」という大きな見出しから始まる記事の中には、次のように書かれている。

アツツ島の全將兵遂に玉碎す。(中略)遂に全員国家の人柱となつた。(中略)今こそアツツ島守備部隊はこの皇軍傳統の精神を遺憾なく發揮したものであつて、まさに神兵の姿であり、三千年來神武の国土に培つた大和魂の時を得ての花々しき炸裂であつた。

この記事にみられる「玉碎」というまでもなく、「国家の人柱」「神兵」が「護国の神」に、また「皇軍傳統の精神」「神武の国土に培つた大和魂の時を得ての花々しき炸裂」が「崇高な献身」に対応することがわかる。このように戦死することとを「軍神化」と表現することは日露戦争からよくみられるが、太平洋戦争の時になると、戦死を賛美する表現が多様になることで、日本国民の戦争に対する感情を高ぶらせる文句としてよく用いられるようになったことは周知の通りである。ここで注目されるのは、前述したように、「散華」に描かれている三田君のアツツ島での戦死が、「玉碎」が代表するように当時の新聞メディアでみられる定型的な文句で賛美されていることである。太宰の同時代の作品に見られる様々な文句への試みから考えると、当時のラジオや新聞メディアがしきりに使っていた定型的表现をそのまま使わなくても、三田君の戦死はもつと個人的に書き上げられたにちがいない。しかし「散華」には、あえて新聞紙上にあふれている表現を使って、三田君のアツツ島での戦死が賛美されている。なぜそのようなおさまりの表現を用いる必要があつたのだろうか。その理由として筆者が注目したいのは、「散華」が掲載されている雑誌『新若人』との関係である。それは当時にあつて『新若人』が「皇道精神」や「民族精神昂揚」を発揚するもつともファシズム性向の強い雑誌であつたからである。そこで次節では「散華」における「アツツ島の玉碎」の意味をめぐつて、小説が掲載された雑誌『新若人』との関連を中心に論じてみたい。

二、雑誌『新若人』における「散華」の位置づけ

雑誌『新若人』は昭和一五年九月に「全日本学徒知的総合誌」として創刊されるが、畑俊六の「創刊を祝す」という創刊の辞にはその目的が明確に記されている。

(前略) 惟ふに強力国家を組織する原動力は人にある。従つて我が皇國の成員が世界無比の皇道精神に透徹し、体力と氣力と優秀なる學術を兼備し、滅私奉公、皇室を中心とする舉國一致の團結を完成するならば、世界無比の強力國家が建設せられる筈である。(中略) 真に國策的にして而も青少年の心理に適合する修養雑誌の出版を待望するところが久しい。然るところに、従来受験雑誌界に覇を唄へつゝあつた歐文社は逸速く此の教訓を捉え、國策的見地から青少年学徒の指導を目ざし、且つ其の修養に資する雑誌『新若人』を出版することになつた。

『新若人』は戦時下の「皇道精神」と徹底的な「舉國一致の團結」による「強力國家」を目的とする青少年学徒の修養雑誌を目指して創刊されたことが示されている。昭和一五年といえ、日本情報局が「日本出版文化協会」を創立し、図書・雑誌の出版や流通を掌握しはじめた時期に当たる。それによる雑誌の廃刊や統合が雑誌界の大きな反撥にもかかわらず、さまざまな形態で行われていたことは対照的に、雑誌『新若人』は言論統制機関たる情報局の強い支援を受けて創刊されたのである。それは「雑誌年鑑昭和一六年」の中で、雑誌『新若人』の創刊について言及する次の文章からも読み取れる。

雑誌創刊の抑制、既存雑誌の整理統合が行はれてつゝある時、學生―主として中等學生を對象とする総合雑誌「新若人」が関係當局の支援の下に歐文社(社長赤尾好夫氏)から創刊され、當局の出版政策の積極的一面を示すものとして注目を惹いた。

雑誌『新若人』が当局の絶对的な支持を得ていたことと、歐文社の社長赤尾好夫が、新体制準備委員の出版側の代表と

して選ばれていたことを考えると、日本ファシズム・イデオロギーを発信する雑誌であつたことは容易に想像できる。「當局の出版政策の積極的一面を示すもの」という文章からは、情報局が「皇道精神」や日本ファシズム・イデオロギーを青年に徹底的に伝えるための国策の手段として、雑誌『新若人』を誕生させた意図がうかがえる。

このような背景の下で創刊された雑誌『新若人』の中に、小説「散華」を置いてみるならば、三田君の「アツツ島の玉砕」を定型的常套句をつらねることで讚美する表現が目立つことには、偶然の一致とは思えないある必然性が浮かび上がってくる。作家大宰治が「散華」の中に「アツツ島の玉砕」が当時のラジオや新聞メディアに氾濫していた言葉を直接に用いているのは、雑誌『新若人』の性向を念頭において三田君の死を語ろうとしたと考えるものである。それは同号の『新若人』には、連載小説「半島（第三回）」（牧野吉晴）、評論「日本陸連の歴史」（中柴末純）、「国體論の典據を正せ」（小島茂雄）などのような「日本主義」傾向の小説や評論によって占められていたことから察知できる。

「玉砕」という言葉を戦意昂揚のシンボルとしてとらえられるのは、「玉砕」という言葉には「日本軍全滅」という意味をあらわすと同時に、日本国民に米英軍に対する敵愾心を煽動し、戦争意識を強化させるという当局の国策的意図が潜まっていたからである。それは前掲した「アツツ島の玉砕」を報じる「大阪毎日」の記事の中に、「一億・誓つて仇を討て」という大きな見出しに次のような文章が見られることからわかる。

（前略）われわれはこの勇士の御靈に對し何をもちて應ぶべきか、皮を斬らして敵の心臓を突き抜き、撃ちて止まむの決意を固めるのみである、心せよ米鬼よ、この仇は断じて討つ、覺悟せよルーズヴェルト今に思ひ知るべし、（後略）

この記事からは、「アツツ島の玉砕」を報告し、「勇士の御靈」という正義の英雄の死に激しい敵愾の心を持って、悪なる「ルーズヴェルト」に「御靈」の「仇は断じて討」たねばならない、と煽り立っていることが明らかに読み取れる。その壮烈な死を称えると同時に、日本国民にアメリカに対する敵愾心を煽り立てるイデオロギー的意図がうかがえる。昭和十七年六月ミッドウエーの敗北から徐々敗戦の兆しが見えはじめた時期に現れた「玉砕」という言葉は、日本政府が戦争に対する日本国民の感情を一層高揚させる目的で用いられたと考えるものである。そして日本政府の新聞報道に対する

制限は、昭和十六年一月の新聞紙等掲載制限令によって一層報道統制の範囲がひろげられていた。この新聞紙等掲載制限令には、「政府は戦時に際し国家総動員上必要あるときは勅令に定むる所により新聞紙其他の出版物の掲載に付制限又は禁止を為すことを得」と、法律によらない無制限の言論統制の権限を政府にあたえたとされる。

特に戦況が悪化した以後では報道は厳しく管理され、たとえば昭和十九年六月のマリアナ沖海戦で日本海軍は空母、航空機の大半を失うにもかかわらず、新聞では「サイパン大激撃戦、五艦撃沈、撃墜三百余機」などという形で記事が載ることが周知のとおりである。（『昭和編年史』昭和一八年度版（2））

「玉碎」という言葉も大本営本部によって創り出されたことを考えると、聖戦または「玉碎」という戦意高揚に関する言論統制がいかに厳しく管理されていたかは想像できる。

特に青少年の読者層を持つ『新若人』のような率先してファシズムを指向する雑誌側がそれに対して敏感な反応を示さないはずがない。このような雑誌『新若人』の編集方針は、読者投稿欄「若人の叫び」からも明確に見られる。例えば千葉市の中村天龍が「日本人全部」という題目で書いた投稿小論には、

（前略）教室で子供達に本年が決戦の年である所以をお話してやつたが先づ最初にかう質問した。「今、日本の國は米英と戦争をしてゐるが、一体誰が闘つてゐるのだらう」「日本人全部です。」と元氣よく答へた子供の顔が未だに忘れられない。（中略）私は今日の佳き日を迎へて、陛下の赤子を教育させて戴く光榮ある責務に、感激を新たにし教壇上に散るの決意をより一層強固にした次第である。（『日本人全部』千葉市中村天龍 昭和一五年一月）

「陛下の赤子」を教育することが光榮であり、この決戦下には教育への情熱が一層強くなったという文章からは戦時下の「皇道精神」が強調されていることが読み取れる。しかしその背景にはいかに言論統制が当時の日本人の心にまで沁み込んでいたかがわかる。また昭和一七年六月号には、倉林治英は「一念不生の境地」の題目下で、

(前略) 茲に於てそれ等軍神の後を継ぎ、その光輝ある功績と偉大なる教訓とを身に體して未來の邦家を雙肩に擔ふべき我等若人は、その重大なる任務を負ふに恥ぢざる日本臣民たるべく、之等偉大なる先輩の壯烈無比なる散華を堅く心中に銘記せねばならぬ。(遞信官吏練習所)

と、述べている。この読者欄からも「皇道精神」を強調すると同時に、青少年たちに戦争昂揚意識を訴えていることが読み取れる。そしてこの投稿で注目されるのは、小説「散華」に関係する「偉大なる壯烈無比なる散華」という言葉が、「玉碎」の同義語として用いられていることである。つまり「散華」という言葉が「玉碎」と同様に戦死讀美の表現として使われていたことを物語ってくれる。雑誌「新若人」の日本ファシズム・イデオロギー的戦略が、読者欄の中で明確に読み取れるということは、創作欄に掲載される作品についても、作家が雑誌「新若人」の編集方針としてのイデオロギーを汲み取る必要性を感じたことも確かだろう。小説「散華」の中に、定型的常套句によって登場人物の戦死への賛美が見られるということは、掲載されている雑誌「新若人」の戦略と深く関わりがあるとみられるのである。

それは当時の太宰の創作傾向と比較してみると一層明らかになる。戦時期の太宰文学の傾向について三枝康高は「太宰治——太宰治の古典意識」の中で次のように述べている。

保田は当時の民衆が苦杯をなめた、現実との接触をあえて断ちきつて、ひたすら上へ上へと爆発的に上昇し、ついには天皇、皇室までも包括してしまう、大よりの美学を樹立した。それとほとんど同じ時期に、太宰はさかさまに「下降志向」とも呼ばれる態度をもって、権力にたいする隠微な内面的抵抗を胸中に秘め、抜きがたい自己矛盾といふフェリオリティ・コンプレックスを媒介として、民衆に奉仕しようとする心情に傾斜したのである。

三枝康高は、太宰の戦時期の文学の特徴として、保田与重郎のような作家たちが天皇・皇室を賛美するいわゆる「上昇志向」とは距離をおいて、むしろ「下降志向」の態度をとっていたと述べている。それは戦時期の太宰文学の代表作とも言われている「津軽」(昭和十九年十一月、「小山書店」)にもよく表れている。「津軽」は太宰自身の生まれ育った故郷をあらためて旅行して書いた紀行形式の小説であるが、太宰は自分の十五年間の東京生活を回想した「十五年間」(昭和一二

十一年四月『文化展望』の中で、「津軽」を書いたころをふりかえって次のように述べている。

私は或る出版社から旅費をもらひ、津軽旅行を企てた。その頃日本では、南方へ南方へと、皆の関心がもつぱらその方面にばかり集中せられてゐたのであるが、私はその正反對の本州の北端に向つて旅立つた。自分の身も、いつどのやうな事になるかわからぬ。いまのうちに自分の生れて育つた津軽を、よくみて置かうと思ひ立つたのである。(『太宰治全集第八卷』(筑摩書房、一九九八、二二六頁))

「津軽」の執筆が日本軍部の南方進出という当時の日本の趨勢に逆行していたことは、太宰自らも充分認識していた。小説「津軽」にみられる庶民へのまなざしはそれ自身が日本文壇の趨勢に抵抗する姿勢であつたといえよう。したがつてこの「津軽」でも読み取れる「下降志向」は、戦時期の太宰文学の一つの特徴として位置づけることができよう。

このような戦時期の太宰文学の傾向に対して、小説「散華」にみられる三田君の「玉碎」に対する賛美の描写は、それに相反していると言ふようがない。というのは「玉碎」に含蓄されている「死」の意味には、いうまでもなく、国家(天皇)のために命を捧げるといふ日本ファシズム的な思想が象徴されているからである。したがつて「散華」にみられる三田君の戦死を賛美する描写は、前掲した戦時期の太宰文学の傾向とは逆行しているように思われる。そこで小説「散華」と掲載された雑誌「新若人」の戦略との関連性が一層明確に浮上してくるのである。前掲したように日本の敗戦の色がだんだん濃くなってくる時期になると、新聞・雑誌メディアに対する当局の検閲が嚴重になることを余儀なくされた。このような時代状況において作家は、雑誌メディアをたんなる作品と読者との媒介という機能だけではなく、雑誌メディアに強いられていた国策プロパガンダというイデオロギーまでを充分認識しなければならなかつたのである。

この「散華」の戦死を賛美する事に対して、高木知子は「太宰の意図はともかく、戦争のための死を賛美するというところ、それ自体が、戦争という状況下では戦意高揚の小説としての任を果たすであろう」と、「散華」が戦意高揚小説であると断言している。むしろ「散華」の戦死賛美の表現だけを見ると、高木知子の批評は妥当だと言えるが、「散華」は単なる戦死賛美小説に止まつてはいない。そこには三田君の「アツツ島の玉碎」とは対照的に、もう一人の青年三井の平凡な死が、この世でもっとも「美しい」死として三田君の死を語る前に描かれているからである。その構想から考えても

「散華」という小説の評価は決して三田君の「玉碎」だけで決定されるべきではない。そのために、小説「散華」の中に描かれている三井君の病死をどう捉えるべきであるかに着目しなければならぬ。次節では「散華」に描かれているもう一つの死の意味を探ることによって小説「散華」が一体何を訴えかけようとしていたのかについて考察したいと思う。

三、もう一つの「死」の意味

「散華」には三田君の「アッツ島の玉碎」とともに、もう一人の青年の死が描かれている。それは三井君の死であるが、三田君の玉碎とは対照的な平凡な病死であった。三井君は病氣（肺結核）のために兵隊にもなれないという失意のうち、病気が進行するとともに、それを素直に受け入れて母親の側で静かに息を引き取る。それは、三田君が日本国のために壮烈に「玉碎」したのとは、きわめて対照的な死に方とも言えるだろう。しかし「散華」の中ではこの三井君の死が、この世の中でもっとも「美しい臨終」として描写されていることが注目される。

三井君の臨終の美しさは、比類がない。美しさ、などといふ無責任なお座なりめいた巧言は、あまり使いたくないのだが、でも、それは実際、美しいのだから仕様がなない。三井君は寝ながら、枕頭のお針仕事をしていらつしやる御堂を相手に、しづかに世間話をしてゐた。ふと口を噤んだ。それきりだつたのである。うらうらと暗れて、まつたく少しも風の無い春の日に、それでも、櫻の花が花自身の重さに堪へかねるのか、おのづから、ざつとこぼれるやうに散つて、小さい花吹雪を現出させる事がある。（中略）私は三井君を、神のよほどの寵児だつたのではなからうかと思つた。人間の最高の栄冠は、美しい臨終以外のものではないと思つた。（八一頁）

母の側で静かに臨終を迎えた三井君の死の美しさは「比類がない」と語られ、「人間の最高の栄冠は、美しい臨終以外のものではない」と断言する。そして「櫻の花が花自身の重さに堪へかねるのか、おのづから、ざつとこぼれるやうに散つて、小さい花吹雪を現出させる事がある」という引用からは言葉とおりの「散華」のイメージが読み取れる。そして「ずばぬけて美しく玉碎した」と賛美された三田君の死と並列されていることに、ある意図を讀ませようとしているので

はなかるうか。この二人の死について鳥居邦朗は「十九年」¹¹の中で、

少なくとも二人の死が等価のものとして並べられていることは確かである。それが美しき死として等価であるということは、玉砕死と病死との間に差はないということである。その基準はどうかやら世俗のそれとは遠いところにあるらしい。

と、三田君の玉砕と三井君の病死を「等価」としている。この対照的にもみえる二人の死が「玉砕」と「散華」という等質の言葉で美化されている。ここで問題として浮かんでくるのは、「散華」に位置する三井君の死の意味である。

三田君という人物は戸石泰一の回想¹²や堤重久の回想¹³からも実在人物であることが判明しているが、三井君という人物に対しては、実在人物かどうかは一言も言及されていない。北川透が「文学の一兵卒——太宰治の「散華」について」¹⁴の中で指摘しているように、三井君については、三田君のような出身地・学歴・容貌などの具体的な描写がないのは確かである。ただ作家志望の文学青年として設定されていない。おそらく三井君のほうは実在人物ではなく、太宰によつて創られた架空の人物である可能性が高い。とすると、問題になるのは、「アツツ島の玉砕」という三田君の戦死を描くのに、それとは対照的な三井君の病死がなぜ必要であったかということである。そこで「三井君の平凡な死」が持つ意味を太宰文学に位置づけて考えることにしてみたい。

太宰の戦時期の文学（中期文学）の傾向について、渡部芳紀の「太宰治論——中期を中心に——」¹⁵の中で次のように述べている。

前期の理想に向かつての人工的で複雑な狂乱の世界から抜け出し、静かで、透明な暖かい世界にはいつて来たのである。〈素朴〉と〈単純〉を愛し、〈正直〉に振舞うことを期すのである。

太宰の前期の作品とはまったく異つた傾向として、〈素朴〉〈単純〉〈正直〉を戦時期の太宰文学の特徴として指摘するのだが、このような傾向は戦争の深刻化とともに、太宰を強く魅了して行つたと語っている。この時期の作品の中で、

もつとも評価の高い「富嶽百景」(『文体』昭和一四年二月～三月)には、渡部のいう〈素朴〉〈単純〉〈正直〉の特徴がよく現れている。その中には日本のシンボルともいふべき富士山の様々な姿が〈素朴〉〈単純〉な文体で描かれているが、次のような有名な一文がある。

(前略) 一せいに車窓から首を出して、いまさらのごとく、その変哲もない三角の山を眺めては、やあ、とか、まあ、とか間拔けた嘆聲を發して、車内はひとしきり、ざわめいた。けれども、私のとなりの御隠居は、胸に深い憂悶でもあるのか、他の遊覧客とちがつて、富士には一瞥も與へず、かへつて富士と反對側の、山路に沿つた断崖をじつと見つめて、私にはその様が、からだがしびれるほど快く感ぜられ、私もまた、富士なんか、あんな俗な山、見度くもないといふ、高尚な虚無の心を、その老婆にみせてやりたく思つて、あなたのお苦しみ、わびしさ、みなよくわかる、と頼まれもせぬのに、共鳴の素振りをみせてあげたく、老婆に甘えかかるやうに、そつとすり寄つて、老婆とおなじ姿勢で、ぼんやり崖の方を、眺めてやつた。

老婆も何かしら、私に安心してゐたところがあつたのだらう、ぼんやりひとこと、

「おや、月見草」

さう言つて、細い指でもつて、路傍の一箇所をゆびさした。さつと、バスは過ぎてゆき、私の目には、いま、ちらとひとめ見た黄金色の月見草の花ひとつ、花瓣もあざやかに消えず残つた。

三七七八米の富士の山と、立派に相對峙し、みじんもゆるがず、なんと言ふのか、金剛力草とでも言ひたいくらい、けなげにすつくと立つてゐたあの月見草は、よかつた。富士には、月見草がよく似合ふ。(『太宰治全集第三卷』筑摩書房、一九九八年、一三五―一三六頁)

この引用は「富嶽百景」を論じる際、よく取り上げられる個所であるが、日本のシンボルの富士山と何処でもみられる月見草が見事に対照化されて描かれている。この時期の太宰文学には、このような〈素朴〉という素材を利用して、文学の(へかるさ)を表現しようとする傾向がよくみられる。まさに「ニッポン・イデオロギーを象徴するかのような富士に、けなげな「月見草」を対置するもの」という解釈が物語つてくれるように、日本のシンボルの富士山と、それとはまった

く対立的な存在ともいえる素朴な「月見草」を対照化させ、日本のシンボルの富士山に相俟ってもっとも似合う存在として描こうとするのは、「富嶽百景」における太宰文学の一つの方法論として位置付けられる。それは前節の中で言及した戦時期の太宰文学における「下降志向」とも相通じるものが感じられる。すなわち「散華」の中に存在する三井君の平凡な病死は、三田君の「アツツ島の玉碎」という日本イデオロギーのシンボルとも言える戦死に対照させるための平凡な「月見草」のような存在だったのでなからうか。前掲したように、「アツツ島の玉碎」は日本イデオロギーを象徴する戦死賛美のシンボルの最初の玉碎であった。それに対して三井君の平凡な死を対照化させることによって、母親の側で静かに息をひきとる三井君の死が、三田君の「アツツ島の玉碎」と相俟って、この世の中でもっとも美しいということには変わりはないとしている。このような「私」の二人の死に対する姿勢からは、どのような死に方をしようと「人間の最高の栄冠」は「美しい臨終」であることには変わりがないというある死生観をうかがうことができる。

四、「文学のための死」の意味

小説「散華」の末尾には玉碎した三田君から死ぬ直前に戦地から送られてきた一枚の葉書が紹介され、その三田君の最後の便りに感動を受ける「私」の心情が描かれている。三田君の最後の葉書は三回も繰り返し返されている。

御元氣ですか。

遠い空から御伺ひします

無事、任地に着きました。

大いなる文學のために、

死んでください。

自分も死にます、

この戦争のために。(八五頁)

詩人を目指していた三田君の最後の葉書に「私」は大きな感動をおぼえる。そしていままでは認めなかった三田君の詩人氣質を認め、「いちばんいい詩人」のひとりであると信じるようになる。そしてこの最後の便りは、この物語を描く動機を与えてくれたと語られている。

はじめから私の意圖は、たつた一つしか無かつた。私は、最後の一通を受け取つたときの感動を書きたかつたのである。(中略) 死んで下さい、といふその三田君の一言が、私には、なんとも尊く、ありがたく、うれしくて、たまらなかつたのだ。(八五頁)

「私」は、最後の便りの中で、「この戦争のために」死ぬという三田君の決断よりも、自分に「文学のために死んでください」と言ってくれた一言に強く心打たれている。そして三田君の「アツツ島の玉碎」より、むしろこの一枚の葉書によって、「私」は三田君を尊敬することができたと書かれている。

繰り返し繰り返し読んでみるうちに、私にはこの三田君の短いお便りが實に最高の詩のやうな氣さへして来たのである。アツツ玉碎の報を聞かずとも、私はこのお便りだけで、この年少の友人を心から尊敬する事が出来たのであつた。純粹の献身を、人の世の最も美しいものとしてあこがれ努力してある事に於いては、兵士も、また詩人も、あるひは私のやうな巷の作家も、違つたところは無いのである。(八六頁)

この引用には、「純粹の献身」を媒介に兵士の戦争のための死と、作家の「大いなる文学のための死」が同一化されている。そして「純粹の献身」はこの「散華」の執筆にあたって、重要なキーワードとして作用されていたのである。

この「純粹の献身」というモチーフは、太宰が「散華」を執筆していた頃、幾つかの作品の中によく用いられていた。当時の太宰の作品をうかがってみると、「純粹の献身」を象徴させる、ある物語がよく使われていたことに気づく。それは「ある水夫の死」を素材とした物語であるが、この「ある水夫の死」の物語は、短編小説「雪の夜の話し」(『少女の友』昭和一九年五月)やエッセイ「一つの約束」(昭和一九年)、長編「惜別」(昭和二〇年九月)の三編に同じく引用されて

いることがわかる。その物語のあらすじは次の通りである。

若い水夫は難破して怒濤に巻き込まれ、岸にたたきつけられ、無我夢中でしがみついたところは、燈台の窓縁であった、やれうれしや、たすけを求めて叫ぼうとして、ふと窓の中をのぞくと、いましも燈台守の一家がつつましくも楽しく夕食をはじめようとしてゐる、ああ、いけない、おれがいま「たすけてえ！」と凄声を出して叫ぶとこの一家の団圓が滅茶苦茶になると思つたら、窓縁にしがみついた指先の力が抜けたとたんに、ざあつとまた大浪が来て、水夫のからだを沖に連れて行つてしまつたのだ（後略）

この「ある水夫の死」は、「純粹の献身」を象徴させる美しい死として、太宰の作品の中に繰り返して引用されている。そしてエッセイ「一つの約束」と長編「惜別」の中には、「ある水夫の死」を引用した後、次のようなままたく同じ文章が書き加われている。

ここに作者の幻想の不思議が存在する。事實は、小説よりも奇なり、と言う。しかし、誰も見ていない事實だつて世の中には、あるのだ。そうして、そのやうな事實にこそ、高貴な宝玉が光つてゐる場合が多いのだ。それをこそ書きたいというのが、作者の生き甲斐になつてゐる。

当時の太宰の作者としての姿勢がうかがえる一文であるが、「ある水夫の死」の話は、「誰も見ていない事實」と解釈され、この事實を見つけ出して描くのが作家の任務であり、生き甲斐であると述べられている。全く同じ文章が二つの作品で繰り返されていることをみても、「誰も見ていない事實」に対するこだわりが感じられる。それは小説「散華」にみえる「純粹の献身を、人の世の最も美しいものとしてあこがれ努力してゐる」という作者の姿勢と相通じるものが感じられる。それはエッセイ「一つの約束」の中に、引き続けて書かれている次の文章をみると明らかになる。

第一線に於いて、戦つて居られる諸君。意を安じて給へ。誰にも知られぬ或る日、或る一隅に於ける諸君の美しい

行為は、かならず一群の作者たちに依つて、あやまたず、のこりくまなく、子々孫々に語り傳へられるであらう。日本の文學の歴史は、三千年來それを行ひ、今後もまた、變る事なく、その傳統を繼承する。

「ある水夫の死」という物語が「誰も見ていない事実」の美しい死として象徴されているように、戦争のために戦っている兵士たちの「美しい行為」が「誰も見ていない事実」として捉えていることがわかる。そしてこれまでの日本文学の歴史がそうであったように、兵士たちの誰も見ていない「美しい行為」は作者たちによつて、子孫に伝えられるべきであると語られている。またそれは当時の新聞・雑誌メディアを通して大いに報じられるものばかりではなく、「誰にも知られぬ或る日、或る一隅に於ける諸君の美しい行為」こそ、日本文学の歴史に残したいものであると語られている。それが「散華」の末尾には、「純粹の献身」という言葉に集約されているともいえる。すなわち「散華」における「大なる文学のための死」というのは、戦争における兵士たちの誰も見ていない純粹の献身こそが日本文学の歴史に刻まれるように努力することを意味していると言えよう。このような日本文学における作者の姿勢が「散華」を執筆していた頃、太宰の他作品からもうかがえるということは、「大なる文学のための死」という言葉には戦時下に生きていた作者たちの日本文学に対する姿勢が表象されていると言えよう。

むすび

いままで小説「散華」に書かれている戦死賛美の表現を中心に、掲載されている『新若人』という雑誌メディアとの関連性を追求してみた。また「玉碎」とは対照的ともいえるもう一人の青年の平凡な死の分析を通して、「散華」を戦時期の太宰文学の中に新たな位置付けを試みた。そして末尾に表れている、「純粹の献身」と「大なる文学のための死」の解釈を通して戦時期の作者たちの文学に対する姿勢を確認することができたと思う。

小説「散華」の特徴として取り上げたのは、これまでの太宰文学ではみられない戦死賛美に対する国策的プロパガンダが明確に読みとれることである。そこで注目しなければならないのは、「散華」が掲載されている雑誌『新若人』の存在である。というのは、『新若人』が青少年読者を持つ、戦時下のもつとも日本ファシズム性向の強い雑誌メディアであっ

たことを考えると、小説「散華」における戦死賛美の表現の必然性が浮かんでくるからである。しかし「散華」には、戦死賛美のシンボルともいえる「アツ島玉碎」とは対立的なもうひとりの青年の平凡な死が同一化されて描かれている。これは戦時期の太宰文学の中でよく見られる、日本の象徴的な存在に平凡さを対立させることによって、その存在をピックアップさせるとする一つの方法論とも言えよう。

小説「散華」には、戦時下の雑誌「新若人」の性向を念頭におきながら、当時の太宰の「死」に対する意識が明確に表れていると言えよう。したがって「散華」は、戦時期の太宰文学における雑誌メディア研究に重要な作品として位置づけなければならない。

注

- (1) 堤重久の「太宰治との七年間」の中に、太宰から三田循司の玉碎の話を告げられた時の感想を、「三田さんとは、太宰さんのお宅で二、三度顔を合わせたことがあった。その二、三度とも、友人の戸石君のかけに隠れるようにして、広い額をうつむけかげんにして座っていた、眼鏡をかけた学生服姿の青年が思い出されて、私はショックを受けた」(一五〇頁)と回想している。
- (2) 「玉碎の思想と白兵突撃」(河野仁「戦争と軍隊」一九九九年八月、岩波書店)の中に「玉碎」という言葉が人口に膾炙し始めたのは昭和一八年五月のアツ島守備隊が総攻撃を敢行後全滅したことを「玉碎」と大本営が発表したことからであるとされる」と書かれている。(七一頁)
- (3) 「広辞苑」一六二頁参照。
- (4) マキノ島の玉碎、タラワ島の玉碎、サイパンの玉碎など敗戦の日まで続くのである。
- (5) 四、「昭和十五年度雑誌界報」(二二頁)
- (6) 明治大正昭和新聞研究会編、「昭和編年史」——昭和一八年度版(2)——、東京新聞資料出版、一九九五年。
- (7) 注6参照。
- (8) 三枝康高「太宰治——太宰治の古典意識」、新有堂、一九八〇年。
- (9) 亀井勝一郎は、「文芸評論家」(一九五一年八月)の中で、「彼の本質を一番よくあらわしているのは『津軽』である。私は全作品の中から何か一編だけ選べると云われるなら、この作品を挙げたい。」と「津軽」が太宰文学の代表作品として評価している。
- (10) 高木知子「太宰治——抵抗か屈服か」(「戦争と文学者」、三一書房、一九八三年、一七八頁)
- (11) 「国文学——解釈と鑑賞」、一九九三年六月号。

- (12) 戸石泰一「『散華』の頃」(『太宰治研究』、筑摩書房、一九五六年)
- (13) 堀重久「太宰治との七年間」、筑摩書房、一九六九年。
- (14) 「日本文学研究」(梅光女学院大学)、一九九九年三月号。
- (15) 「国文学——解釈と鑑賞」、一九八七年四月号。
- (16) 松本健一「太宰治とその時代 含羞の人」、第三文明社、一九八二年、九三頁。